アーカイブ室新聞　(2012 年 7 月 26 日　第 617 号)

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室　中桐正夫

＊元東京天文台測光部のマイクロフォトメーターの里帰り－その 2－

1957 年 7 月 1 日～1958 年 12 月 31 日､国際地球観測年(International Geophysical Year、略称:IGY) という事業が国際的な協力で行われ、オーロラ、大気光(夜光)、宇宙線、地磁気、氷河、重力、電離層、経度・緯度決定、気象学、海洋学、地震学、太陽活動の 12 項目の観測が行われた。日本もこれに参加し、この中には天文学に関係した事業が多く含まれており、当時の東京天文台にとって大事業であった。当時のソビエト連邦とアメリカ合衆国が人工衛星・スプートニク 1 号とエクスプローラー1 号を打ち上げたのは、この国際地球観測年のためであった。この国際地球観測年の主な成果は、バン・アレン帯の発見、中央海嶺、プレート・テクトニクス説の確認作業などであった。

写真 1

元東京天文台測光部はオーロラ、大気光（夜天光といった）の観測をしており、この国際地球観測年に参加していた。その当時、オーロラのスペクトル解析のため導入されたマイクロフォトメーターがこの世に存在していた。その後、測光部の斎藤馨児氏に師事していた方が、東京天文台が廃棄した測光部のマイクロフォトメーターを譲り受け、高知県土佐市の実家に保管されていたのである。この情報は国立科学博物館の天文担当の洞口氏から得られ、アーカイブ室として現在の所有者である小関氏が使用する予定はないということなので、譲渡していただくことにした。

マイクロフォトメーターはかなりの重量物なので、重量物輸送業者にその輸送を依頼し 7 月 26 日早朝、国立天文台に到着した（写真 1）。今回到着したものは、１）マイクロフォトメーター本体（写真 2）、２）駆動モーター部（写真 3）、３）定電圧電源（写真 4）、４）その他附属品（１．直流高圧電源（写真 5）、２．光電子像倍管ユニット（写真 6）、３．光源ユニット（写真 7）、４．駆動中継ロッド（写真 8）、５．電源ケーブル、６．信号ケーブル）である。マイクロフォトメーターはとりあえず天文機器資料館の収蔵庫に使っている自動光電子午環棟計算機室に搬入した（写真 2）。今回は、クレーン作業は行わず人力での搬入で、4～5 人の強力（ごうりき）によって階段を使って２階まで上げた。

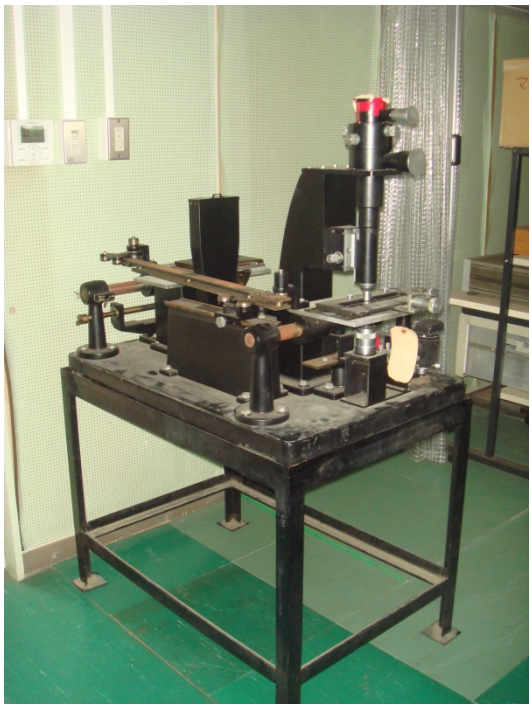

写真 2

写真 3、4

写真 5

写真 6

写真 7

写真８

このマイクロフォトメーターは、筆者がナルミのマイクロフォトメーターとして想像していた形とずいぶん違っていた。本体搬入前に届いたファイルの図面、小関氏から送られてきた写真などから分かっていたことである。東京天文台時代にあり、筆者が想像していたマイクロフォトメーターは写真９にようである。

写真９

今回のマイクロフォトメーターのファイルにあった図面などについては稿を改めて報告する。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp